

その子は、そばの男の子たちに声をかけた。
その中に弟がいるようだ。

僕はその子をじっと見た。
その子もじっと見つめる僕の方に
気付き、僕の方を、じっと見た。

そのまま、鳥居をくぐって、
駅の方へ行ってしまった。
僕はひきつかれる様にその後姿を追った。

僕はそんな事を思い出しながら、
国道橋を渡り、男山（おとこやま）が
対岸に大きく、こんもりと見えるところ迄、
ポーとしながら、あてもなく歩いた。
疲れは感じなかった。

家に帰ると、すぐ、母が買物から帰って来た。
僕が早く帰っているので不思議そうだった。

「よっちゃん、早いねえ。」
ニコニコして僕に言った。

きちんと余所（よそ）行きのかっこうで
家を出たのに、僕は早く帰って来たのだ。
疑われないように、平静を装ったが、
この時も、また、事実を隠さずを得なかった。

しばらくして、いても立ってもいられず、
自転車で、深草の安田とこへ行った。
安田に、彼女住所と、寺の名前と、
彼女のお父さんの名前を教えてもらった。



513